



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2597号 2015.8.25 発行

### 難病ALS患者、FM番組で心境オンエア



読売新聞 2015年8月24日

「声が出る限り続けたい」と放送に臨む米沢さん(右)(札幌市西区で)

「滑舌が悪いけど、どうかご容赦ください」――。笑いを交え、ややゆっくりと語りかけるのは、札幌市のコミュニティーFM・三角山放送局で6月からパーソナリティーを務める千歳市の米沢和也さん(57)だ。米沢さんは、国が難病に指定している筋萎縮性側索硬化症(ALS)を患っている。発声できなくなるのが、明日か来月かも分からない病気だ。

「舌がもつれて話せなくなるまで、でき

る限りのことをしておきたい」と言う米沢さんは、6月から毎月1回の生放送に臨んでいる。

#### ■発症から2年

放送3回目の22日、米沢さんは番組で、「発症から2年と数か月。肩と両腕などがかなりやせているけど、歩けるのはありがたいところ」と、病状を紹介した。

不調の兆しはわずかな変化だった。2013年春から腹部や首、舌など、至る所が頻繁につるような感覚に襲われた。同年夏頃には、喫煙しようと握ったライターで火がつけられなくなるほど、左手に力が入らなくなった。

ALSと診断されたのは翌14年1月。「そうだろうとは分かっていたけど、ピンとこなかった」。その後、左腕が上がらなくなり、右腕にも力が入りにくくなった。首の筋肉も弱り、歩いていて突然、頭がお辞儀するように下がってしまうようになった。

パーソナリティーになったきっかけは、同FMの番組にゲスト出演したことだった。病状が進み声が出なくなった後も、患者がパソコンで入力した文章を、自分の声で再生できるパソコンソフト「マイボイス」の利用者として、使い心地などを話したことで、同FMを運営する会社の木原くみこ会長から誘われた。

米沢さんは「まだ病気の認知度は低い。患者の思いを伝えるのも使命」と承諾。新番組「ALSのたわごと」が6月27日に始まった。

#### ■音楽交え笑いも

初回の放送では、好きな音楽を交えながら、今年3月に訪れた、大阪市のテーマパーク「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)」で、アトラクションを楽しんだ経験を披露。「冥土の土産にしては激しかった」と笑わせる一方、「まだ歩ける。なくしたものを悲しむより、今あるものに感謝を」と呼びかけた。

#### ■悩み隠さず

患者としての悩みも隠さない。「死ぬのは困るが、生きていながら地獄を味わいたくない」。

ALS患者は、まぶたが動くうちはまばたきで意思が伝えられるが、いずれは、暗闇で耳だけが聞こえる状態になるとされる。米沢さんは「この状態になるのが一番怖い」と訴える。

ALSは誰でも発症する可能性のある疾患。今後は、診断が下された時からの心境も話すつもりだ。

患者や家族で組織する日本ALS協会（東京）によると、患者がラジオのパーソナリティーを務めるのは前例がないという。同協会の金沢公明事務局長は「患者たちの励みにもなり、聴取者の患者に対する見方も変わると思う。大事な活動だ」とエールを送る。

放送は毎月第4土曜日午後1時から1時間。次回は9月26日を予定している。

ALS 運動をつかさどる神経が障害を受けて、手足や呼吸器など全身の筋肉の力がなくなっていく病気。原因は不明で根本的な治療法や予防法はない。症状が軽くなることはなく、病気になって2～5年で呼吸筋が侵され、呼吸不全で死亡する例が多い。厚生労働省によると、昨年3月末時点で、国から医療費の助成を受けている患者は、全国で9240人、道内で347人いる。

## 介護保険料月5000円→8000円 負担はどこまで膨らむのか？



産経新聞 2015年8月24日  
超高齢化社会が到来し、介護費の負担増は避けられない？（写真はイメージです）

「介護」が高齢者の家計や国の財政を直撃する負担激増時代の足音が迫っている。団塊の世代が75歳以上になる10年後の平成37年度は、高齢化の進展で介護サービスの利用者は200万人近く増え、670万人を突破する。介護給付費は倍増の約20兆円、介護保険料も全国平均で月額3000円近く増え、8000円を超える。政府は8月から所得に応じて介護利用料（一律1割）の2割負担に踏み切ったが、負担増到来への序章に過ぎない。

### 天井知らず

在宅や介護施設で介助や食事などのサービスを利用した料金は、利用者が原則1割を負担し、残りは税金と保険料が半分ずつカバーしている。うち65歳以上が毎月支払う介護保険料は地方自治体や広域連合が3年に一度見直す仕組みだ。今年度は見直し時期にあたり、65歳以上は4月から新しい保険料が年金から天引きされている。

ただ、保険料は介護保険制度が発足した12年度以来、介護需要の高まりとともに、「天井知らず」の“高騰”を続けている。

発足当初は全国平均で2911円。15年後の今年度からは5514円になり、37年度には8165円（厚生労働省の推計）に達するが、あくまで全国平均で、保険料はそれぞれの自治体などが介護事業者を支払う費用を基に、介護を必要としている高齢者数などで算定しており、地域で保険料が異なる「地域格差」がある。

厚労省の推計通り37年度に全国平均8165円に達した場合、「保険料の最高額が1万円を突破する自治体も出てくる」（厚労省幹部）といい、年金暮らしの高齢者の家計を直撃する。

その予兆は今年度の見直しで読み取れる。高齢者の健康維持のため、介護予防に力を入れ、保険料を引き下げた自治体や広域連合は全体の1・7%に当たる27しかない。

逆に、全体の94%にあたる1488の自治体などは保険料を引き上げたのだ。最高額は奈良県天川村。美しい大自然に恵まれ、その4分の1が吉野熊野国立公園に指定されている山村の高齢化率は46・7%と高く、昨年度まで4849円だった保険料は一気に8686円にアップし、1万円台は時間の問題だ。

対照的に最も低い鹿児島県三島村は離島で施設が少ないことなどから、2800円（今回は据え置き）。天川村との差は5886円もある。厚労省によると、高齢化率や要介護の認定率が高いところほど上昇する傾向が強い。

### 被災地痛撃

今回の保険料改定では、東京電力福島第1原発事故に伴う避難区域の双葉、大熊、楢葉、浪江の4町と飯舘、葛尾両村が高額保険料上位20以内に入った。特に8003円の飯舘村は天川村に次ぐ2位となった。

国の特例措置で避難区域の高齢者について、保険料と利用料の自己負担は原則として全額免除されているものの、避難暮らしで体調を崩した高齢者が増えたことに伴い、要介護の認定率が上昇、結果的に保険料がアップした。

「事故前は三世代や二世代同居で高齢者の面倒をみる家族がいたが、避難暮らしで家族がバラバラになった。さらに、避難暮らしで引きこもり、畑仕事で身体を動かす機会も減ったからではないか」。厚労省幹部はこう分析する。

保険料の上昇は当然、介護費の上昇に直結する。介護給付費は26年度で約10兆円だが、団塊の世代をはじめ、介護を必要とする高齢者が増える37年度は約20兆円に跳ね上がる。こちらも天井知らずの膨張で、国の財政を圧迫する。

### 応益負担

家計も国の財政も介護費増大で破綻しかねない事態を回避するため、政府は8月から制度発足以来、初めて利用者の自己負担を現行の1割から2割に引き上げた。対象は一定の所得のある高齢者で、単身で収入が年金だけの場合は年280万円以上。個人単位で認定されるため、夫婦で年金合計額が346万円以上で「夫が280万円以上、妻が280万円未満」の場合は「夫が2割・妻は1割のまま」と負担が異なるケースもある。

厚労省としては、所得があれば高齢者でも支払い能力に応じて、より多く負担してもらう「応能負担」の方針を打ち出し、膨らむ介護費の抑制につなげるのが狙いだ。2割負担の対象になるのは60万人。介護サービス利用者506万人（4月時点）の約12%に相当する。厚労省によると、今回の負担増で、利用者負担を除く介護費は29年度に720億円の抑制になると試算している。

だが、2割負担を導入しても抑制額は介護費年約10兆円の1%に満たず、さらなる負担増の動きも出始めている。財政制度等審議会（財務相の諮問機関）が6月に出した建議では、介護保険制度改革として「2割負担の対象者拡大」を盛り込んだ。

先手を打たれた厚労省は警戒するものの、超高齢社会が本格的に到来する37年度まで残された時間を踏まえれば、対象者拡大を含めて痛みを伴う改革論議が急務だ。

（政治部 岡田浩明）

### 宮城) 福祉施設の通所者ら、高校生からそば打ち学ぶ 朝日新聞 2015年8月24日

#### 全国大会で準優勝した技を伝える幌加内高校生＝涌谷町涌谷

心身にハンディのある人が通って仕事をしている涌谷町の福祉施設「共生の森」の通所者ら約20人が22日、北海道幌加内高校生から指導を受けた。施設はそば店を開く準備を進めていて、味に磨きをかけるために招いた。

高校生は、東京都内で21日に開かれた全国高校生そば打ち選手権で準優勝したメンバーら6人。通所者らは、同高教員の説明を受けながらそば打ちの様子を見つめた。施設でそばを担当する専門員の久道章夫さん（64）は「そば粉に水を注ぐ時から基本に忠実で、参考になる」と話した。

計画では、通所者が町内でそばを栽培、製粉し、店を出したり、直売したりする。そばを選んだのは、多数が仕事に加われるのが理由。町から無償提供さ



れたかつての保育所を改修して店舗にする。設置した窯で、通所者が薬味皿やそばちょこ作りを続けている。(島田博)

### 若竹学園を訪問し子どもたちと交流／高松紫雲LC 四国新聞 2015年8月24日



高松紫雲ライオンズクラブ(LC、桑崎博之会長)のメンバーは23日、香川県高松市中山町の情緒障害児短期治療施設「若竹学園」を訪問し、同園の子どもたちとバーベキューなどを通じて交流を深めた。

訪問は、日ごろ大人と接する機会の少ない子どもたちとふれあおうと、昨年から行っており、今回で2回目。メンバー15人が参加した。

子どもたちとメンバーは、イノシシ肉のバーベキューや焼きそばなどを頬張りながら、会話を楽しんだ。香川県高松市国分寺町を拠点に活動する和太鼓集団「夢幻の会」による迫力ある演奏も堪能した。

### 岐阜県警の押収一部取り消し 社福法人が準抗告 中日新聞 2015年8月24日

岐阜県警から不当な家宅捜索を受けたとして、同県笠松町で診療所などを運営する社会福祉法人が押収処分の取り消しを求める準抗告を岐阜地裁に申し立て、同地裁が一部の証拠品の押収を認めない決定をしていたことが分かった。決定は21日付。

準抗告の申立書によると、この社会福祉法人は、同一の医師が複数の診療所の管理者を兼任することを禁じた医療法違反の疑いで、8月6日夜から11日の間の計3日間、県警の家宅捜索を受けた。運営する診療所2施設や老人ホーム、薬局など複数施設で、患者の診療録(カルテ)や診療報酬明細書、伝票など約1000点が押収された。申立書は「広範囲の押収処分が容疑事実の証拠収集として必要なものとは考えられず、違法な処分」と主張した。

岐阜地裁の決定書では処方箋などについて「容疑事実についての関連性が認められず差し押さえの必要がない」として、約230点の押収処分を取り消した。

決定を受け、準抗告を申し立てた郷原信郎弁護士は「極めて軽微な事件で手当たり次第に押収した処分は、重大な問題だ」とコメント。押収処分の取り消しが一部にとどまったことを不服として近く最高裁に特別抗告を申し立てるという。

一方で、県警生活環境課の山田俊洋次席は「捜査は適正に行われている」と主張。「事件については捜査中なのでコメントは差し控える」と述べた。県警は処分が取り消された押収品を社会福祉法人に返却する方針。

### 久留米方式 自殺減に成果 医師会と弁護士会が連携 うつ病患者サポート 情報共有、無料相談も [福岡県] 西日本新聞 2015年08月24日

自殺対策「久留米方式」の連携イメージ



交通事故の5倍以上の死者がいる自殺者を減らすため、筑後地区の医師会と弁護士会が連携してうつ病患者をサポートする「久留米方式」が成果を上げている。多重債務や過労などの問題を抱えた患者の相談を医療機関から申し込むことができる制度で、弁護士が無料で法的サポートに当たるのが特徴だ。

久留米市では2009年に86人だった自殺者が14年には56人に減少しているが、その間

に医師会と弁護士会の連携の仕組みが確立している。

自殺原因として最も多いのはうつ病だ。不眠などの症状が出た人はまずかかりつけ医の内科を受診するケースが多いため久留米、小郡三井、大川三瀬、浮羽の4医師会は10年12月、かかりつけ医が患者を精神科に橋渡しすることで適切な治療に結びつける仕組みを始めた。

一方、県弁護士会は13年12月、自殺の恐れがある人や支援者が電話や面談で無料相談に応じる制度を導入。筑後部会はこれに加えて独自に医師会との連携を始めた。医療機関や保健所を訪れた患者に、借金や労務上のトラブルがある場合、患者本人の同意を得て専用のファクス用紙に必要事項を記入。送信すれば48時間以内に弁護士に相談できる仕組みだ。要望があれば、臨床心理士などの同席も求めることができる。

具体的に自殺防止につながったケースも報告されている。仕事で金銭トラブルを抱えた50代の男性。相談相手として身近な精神保健福祉士に対しては立ち入った話ができなかったが、客観的な立場で弁護士が関わるようになって重い口を開き始め、回復に至った。

うつ症状を抱えていた40代男性は、集合住宅の上階との騒音トラブルがきっかけで思い詰め「住人に仕返しして私は自殺する」とほのめかすようになった。久留米方式による弁護士との面談を通じて自殺を食い止めることができた。

医師会と弁護士会の協力による新たな取り組みの模索も始まっている。県弁護士会自死問題対策委員長の大石昌彦弁護士（久留米市）は「法律相談などで弁護士がうつ病の疑いがある人に接した場合、弁護士会が医師会に連絡して治療につなげる仕組みをつくることも検討中」としている。

## 閉じた世界の論理を記述したい

『日常に侵入する自己啓発：生き方・手帳術・片づけ』著者、牧野智和氏インタビュー  
シノドスジャーナル 2015年8月24日

### 自己啓発の閉じた世界

—本日は、『日常に侵入する自己啓発：生き方・手帳術・片づけ』著者の牧野さんにお話を伺います。前著『自己啓発の時代』では、2010年ごろまでの自己啓発書について取り上げられていますよね。リーマンショック後の景気悪化や震災など、この頃から、社会情勢はまたどんどん変わって行きましたが、自己啓発の分野にも変化があったのでしょうか。

編集者さんにお話をうかがうなかで、幾人かがリーマンショック以降、より「本質的なもの」が求められているようだと言っていました。ですが、自己啓発書全体のトーンが明らかにそれを受けて変化したという傾向は、さして観察できなかったように思います。男性向けビジネス書のトーンが一部強迫的になっているところはある気はするのですが。

つまり、「ポジティブになることがきっといい成果をもたらす」というようなトーンではなく「ポジティブになれなければ一生敗者のままだ」というような二極化の押し出しがしばしばみられるようになっています。ただ、これが時代の影響かどうかは分かりません。

多くの出版社、多くの書き手が入り乱れる自己啓発書業界のなかで、より強い書き口を打ち出して差別化を図っているという側面もあるでしょうから。

もう一つ、2011年に起きた震災、つまりこの社会で起きた未曾有の出来事は、人々の生き方や働き方を指南する自己啓発書にどう影響したのだろうかということも調べてみたことがあるのですが、それもさして観察できなかったように思います。

本の冒頭で少し震災に触れるようなものはいくつかあるのですが、それとて「震災の被害にあった人も、あわなかった人も一緒に頑張ろう」というように、著者がもともとやりたいことの前置きとしてしか言及されることが圧倒的に多かったです。

そもそも、自己啓発書の説得性や明快さを高めていくにあたって、この世の中の出来事をつぶさに論じていくことは阻害的になるのだと思います。世の中のことはそこそこに観察する、するとしても自己啓発の世界の論理にしたがって観察して取り入れ、内的な整合

性や面白さを増していく。

そういう相対的に自律した、完結した自己啓発の世界があるよなあということを、資料として自己啓発書を読むたびに思い重ねてきて、その閉じた世界の論理を記述したいと思って今回の本を書きました。それは今日の社会を描き出すことにもつながると思いました。

——牧野さんはもともと少年犯罪の報道分析をされていたんですよね。それがなぜ自己啓発をテーマに研究しようと思われたのでしょうか。

2000年代前半、森真一さんの『自己コントロールの檻』や、樫村愛子さんの『「心理主義化する社会」の臨床社会学』、斎藤環さんの『心理学化する社会』など、私たちの暮らす社会の関心がどんどん「心」に向かっているとする指摘が幾人かからなされていました。私もそれを受け、修士論文では、少年犯罪報道を対象としたこのテーマの実証に取り組みました。

具体的には、1960年代まであった「貧しさゆえの犯罪」「都会のひずみが生んだ犯罪」というような「社会」を手がかりとする解釈枠組がその後消失し、1970年代から1980年代にかけて「家庭」「学校」問題として少年事件を捉えようとする枠組が支配的になったのち、1997年の神戸・連続児童殺傷事件以降は「心の闇」を解き明かそうという枠組が新たに登場する、というような展開を追いかけました。

ですが、少年犯罪報道を読み過ぎて精神的にしんどくなってしまったことと、他者を解釈する枠組ではなく自分を解釈する枠組の心理学化こそがもともとやりたかったのもそのことに取り組んでみようということ、博士課程に入ってからそれまでやってきたことを一旦ほとんど捨てました。

で、「自己の心理学化」というテーマで何を調べるといいかなと探していたところ、たどり着いたのが「自分探し」をテーマにした特集をしばしば組んでいた『an・an』でした。

雑誌を色々調べていて『an・an』にたどり着いたのですが、調べているうちにビジネス誌も「○○力」を沢山ぶちあげて、自分探しではないけれど「自分磨き」を煽っているなと思ってそれも調べ出したり、『an・an』と似たようなことを言っているかもしれないと思って就職対策書にも手を伸ばしたりしました。

そうやってみていくうちに、「自分探し」「自分磨き」を称揚しているのは心理学者やカウンセラーだけでなく、小説家だって、エッセイストだって、占い師だって、タレントだって、皆同じようなことを言っているよなあということが段々分かってきて、だとすれば「心理学化」という括りは適切じゃないかなと。ここでようやく、これらは多分「自己啓発」って括るべきだと気づいて、自己啓発書の分析を行うことにしたんです。

——この本の中で「自己啓発」はどのような定義なんですか。

うーん、難しいです。もともとこの言葉は、企業における人材開発論の周辺から出てきている言葉ですが、その後この言葉には独自の意味付与がなされて今に至っていると思います。

1980年代であればこの言葉は「精神世界」に近い意味合いをかなり含んでいたと思います。「自己啓発セミナー」が隆盛したのはこの頃でした。ですが、今は自己啓発という言葉はもう少しフラットになっていて、それと並行して自分を変えよう高めようとするメッセージもどんどん拡散しているように思います。

今回の本でも書いていることですが、なんでも自己啓発の素材になってしまうのが現在のなので、くっきりとした定義を与えることは難しく、それが私の研究の弱点なのですが、でも今回はそこを開き直って、自分自身を高めようとする活動を丸ごと捉え、その全体的なベクトルを描いてみようと思いました。

片づけ＝人生が変わる！？

——第5章でも触れられていますが、特にいま、「片づけ本」がすごいブームですよ。

ちょうどこの本が出たばかりのとき、近藤麻理恵さんが米タイム誌の「世界で最も影響力のある100人」に選ばれたというニュースが出たので、そうですね、一つの潮流になっ

ているのかもしれませんが。

もともと日本は、仏教圏ということもあって、掃除・片づけと道徳・精神修養が結びつきやすい文化的背景をもっているのだらうと思います。これは仏教圏特有の傾向だそうなのですが、学校という学びの場で掃除をさせられてきたという私たちの経験もまた、掃除をそれのみに留めずにおくメッセージを受容する下地になっているのでしょう。

ですが、管見の限りでは、その伝統から直接的に、近年の「片づけブーム」が生まれたのではないように思います。

一つのきっかけは、ローヤル（現イエローハット）創業者の鍵山秀三郎さんだと私はみえています。会社創業以前から行ってきた早朝掃除が、企業経営におけるひとつの手法として1990年代前半に注目を集めたあたりから、近年のブームは動き出したように思います。——はじめは企業で使われるものであったと。いまは、「家の片づけをして幸せになろう」という文脈ですよ。

両方とも今でもあるのですが、近年、より注目を集めているのは後者かもしれません。興味深いと思うのは、長い間「きれいにする」「整えること」それ自体を目指してきた家の片づけ論が、あるときから自分を好きになったり、自分を変えたりするための営みという意味を持ち始め、場合によっては家をパワースポットにしようという聖なる営みにもなっていくということです。

この経緯については、先ほどご紹介いただいた拙著の第5章にあれこれと書いていますので省略しますが、それらのあれこれを上手く統合し、近藤さんや「断捨離」のやましたひでこさんのような、主張とキャラクターとがしっかり立った著者が旗を振ったところで、今日の「ブーム」が起きているのだと思います。

**自己啓発書とは違うリズムと文体で**

——先ほど、自己啓発の世界を「閉じた世界」と仰っていましたが、これからの自己啓発に変化はないのでしょうか。

この本のもとになった「プレジデントオンライン」での連載を2012年に始めてから、書店に行くと自己啓発書コーナーをぶらぶらする習慣がついたのですが、そのときから現在に至るまで、大きな方向は変わっていないように思います。

水野敬也さんの『人生はニャンとかなる！』だとか、近年のアドラー心理学本の陸続だとか、いくつかの新たな動向はありますが、ここ15年ほどの「見せ方」を重視する傾向、ピーター・ドラッカー等の「大物」の主張が分かりやすく解説される本が陸続する傾向を考えれば、根本的な地殻変動ではないように思います。

いずれにせよ、近年の動向については私なんかよりもっと詳しい方がいると思いますが、メッセージを極限まで絞り出していけば、男性の自己啓発のゴールは何よりも仕事、女性は自分探しという点は近年に限らず、ここ40、50年近く変わっていないのではないのでしょうか。

——この本は、アンチ自己啓発とまた一線を画しているなと感じたのですが、その点は意識されていませんか。

自己啓発をテーマにした書き物をする、もっとこんな学術的な分析じゃなく、世にはびこる自己啓発書をスパッと一刀両断してほしいとか、もっとパッと分かる内容にしてほしいとか、そういうコメントあるいはご批判を受けることがあります。

もちろん、分かりづらい部分は私の筆力の問題が多分にあるので、ただひたすらに謝るしかないのですが、でも、一刀両断してほしいというコメントと合わせ、一方でこうも思います。

まず一刀両断ということについては、そうはっきりと切り捨てられるほど、自己啓発的なメッセージの浸透は表層的ではないだらうということ。それは、私を含めた、この現代を生きる多くの人々のなかに、多かれ少なかれ入りこんでいると思います。「自己啓発書に騙されないオレ」のような立ち位置は単純には成り立たないと思うのです。

また、もっと分かりやすくということについては、それこそが今日の自己啓発書の作り

方なのだと思うんです。一目で分かって、ストレスなく読めて、武田砂鉄さんが『紋切型社会』で述べるところの「紋切型」を通して、同時代的な感性にすっと溶け込んでいくという。で、そういう書き方から距離をとりたいたいなど。

つまり、殊更分かりにくくしたつもりはないのですが、アカデミックな書き方の可能性を追い求めつつ、そのなかでできるだけ多くの人に分かってもらえるような書き物を作ろうと私なりに努力するなかで、自己啓発書とは違うリズム、違う文体で自己啓発について論じたのがこの本です。違うリズム・文体の書き方を通して、自己啓発書のある種の異様さを浮き彫りにしようとしたのでした。

狙いということでもう一ついえば、邦題の方ではあるのですが、この本のタイトルはジャック・ドンズロ『家族に介入する社会』に引っ掛けたものです。家族という領域にある種「上から」介入する統治性と、人々のささやかな日常を自らの気づきと自助努力によって組み替えることを促す、つまり「下から」個人へと誘いかけていく統治性とはある種対照的で、その対照性を大きなスタンスとしては打ち出しています。

本の中では、ニコラス・ローズ（もともとはミシェル・フーコー）が述べる統治性概念は大きすぎて実証的な検討ができないと述べているのですが、結局総体的なスタンスとしては、前著に引き続いてまた頼ってしまいました。今後はもうちょっと違うアプローチを探していきたいと思います。

**日常に侵入する自己啓発：生き方・手帳術・片づけ**

著者／訳者：牧野 智和 出版社：勁草書房（2015-04-09）

定価：¥ 3,132 Amazon 価格：¥ 3,132 単行本（334 ページ）

ISBN-10：4326653930 ISBN-13：9784326653935

**牧野智和（まきの・ともかず）** 教育社会学

1980年東京生まれ。大妻女子大学人間関係学部専任講師。早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程満期退学。博士（教育学）。著書に『自己啓発の時代—「自己」の文化社会学的探究』（勁草書房）、共著に『どこか<問題化>される若者たち』（恒星社厚生閣）など。



## 斜面

信濃毎日新聞 2015年08月23日

女子生徒は吹奏楽部でトロンボーンを担当し、コンクールに向けて熱心に練習していた。男子生徒は小学校の卒業文集に「人を助ける人になりたい」と書いていた。大阪府寝屋川市の同じ中学の1年生平田奈津美さんと星野凌斗君だ◆夢を抱いていた二つの命が無残に奪われた。遺体はともに粘着テープが巻かれた状態だった。そのむごさに言葉を失う。平田さんの遺体を遺棄した疑いで逮捕された市内の45歳の男は「同乗者」の仕業だと、否認している。事件の全容解明を急いでほしい◆子どもが外で連れ去られる事件が後を絶たない。昨年は神奈川県相模原市、札幌市、岡山県倉敷市と続き、神戸市では小学校1年の女兒が切断遺体で発見される最悪の結果になった。そのたびに地域の見守りの大切さが言われてきた◆寝屋川の場合は、どうだったのか。まだあどけなさを残す2人が深夜、自宅近くのコンビニにたたずんでいた。未明には駅前の商店街を行ったり来たりしている。それを見ていたのは、物言わぬ防犯カメラだけではなかったはずだ◆確かに見ず知らずの子どもを注意するには勇気が要る。不審者に間違われるかもしれない。ならば顔見知りを広げよう。栃木県日光市では地域の子ともと大人と一緒に歩き「安全マップ」を作る取り組みが続く。10年前、下校途中の小1女兒が連れ去られ、殺害された重い教訓が生きる。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行